

調査・研究紹介

インドの最近の穀物需給事情

一、はじめに

インドは人口が約一〇億人で中国に次ぐ世界第二の人口大国である。中国ほどではないにしても、九〇年代に入って経済自由化政策の下で高い経済成長を続けており、長期的には世界経済において大きな位置を占める可能性をもつ国といえよう。

現在インドは食料をほぼ自給しているが、将来においても食料自給を維持するか、あるいは巨大な輸出または輸入大国に転化するかによって、世界の穀物市場に大きな影響を与える可能性がある。本稿では、主に九〇年代のインドにおける穀物の需要および生産の状況を整理することで、インドの穀物需給の将来を展望してみたい。

二、穀物生産量の変化と輸出入

インドはかつて一九六〇年代の半ばに大規模の旱魃により大きな飢饉に見舞われた。その後積極的に緑の革命を進め、それによって穀物生産は順調に増加してきた。そして、八〇年代の半ば頃からほぼ恒常的に穀物の自給が可能となり、現在は年間一〇〇〇三〇〇万トンの穀物を輸出する穀物輸出国にまでなった。現在インドの穀物生産量は約二億トンであるが、その四三％は米、

三五％は小麦、一六％は雑穀、そして残りの五％が豆類である(二〇〇〇—〇一年度)。

六〇年代後半に始まった緑の革命は、高収量品種の導入と、インド西部における小麦一稲の二毛作、および東・南部における稲の二期作化を進めることで、飛躍的な穀物増産を達成してきた。この穀物増産は一九八〇年代まで人口増加率を上回る速度で続き、人口一人当たりの穀物消費可能量はほぼ順調に増加してきた。一九九〇—九一年度のそれは、一人一日あたり五一〇グラム、年間一八六キログラムに達した。

三、九〇年代における穀物増産の鈍化
しかし、九〇年代に入って、穀物生産の増加速度にけがりが見え始めた。穀物生産量は、九〇年代もトレンドとしては増加を続け、穀物の輸出も続いている。しかし、九〇年代の穀物生産の増加率は年平均で一・七％と、人口増加率の一・九％を下回り、人口一人当たりの穀物消費可能量も九〇—九一年度をピークに、以来減少傾向にある。

これは、インドの一人当たり穀物需要量がピークを過ぎ、需要量が減少する段階に入ったことを示しているのだろうか。そうだとすれば、インドの食料問題は量的には

解決したことになる。インドのこれからの穀物増産は、主に輸出に向けられることになり、インドは世界有数の穀物輸出国、特に米の大輸出国としての地位を世界市場において占める可能性もある。

だが、こうした見方は楽観的過ぎるだろうというのが筆者の考えである。現在インドの穀物供給が過剰気味であるのは確かにしても、将来もそうした状況が続くとはいえないのではないかと考えられるのである。四、インドの穀物需要増大の可能性

インドの一人当たりの穀物需要が将来的には大幅に増大する可能性がある。筆者が考える根拠の一つは、インドに存在する膨大な貧困層の存在である。インドでは現在でも人口の三〇四割が貧困線以下の貧しい人々である。その多くは農村部に住む。九三—九四年度の農村部の所得階層別に穀物の摂取量を見ると、例えば一月の一人当たりの消費額が五六〇ルピー(約一三〇〇円)以上の階層では最高の年間一九〇キログラムの穀物を直接消費しているのに対し、一二〇ルピー(約二八〇円)未満の最低の消費階層では年間一六キログラムの消費に過ぎない。中間層の二三五—二六五ルピーの階層でも年間一六四キログラムであり、農村部ではまだ所得(消費)階層が高いほど穀物の直接消費量が多いという状況にある。つまり、農村部では穀物の直接消費量はまだ飽和状態に至っていないのである。

農村貧困が緩和すれば、貧困層を中心に穀物需要はまだ増加すると予測される。

将来的にインドの穀物需要が増大すると考えられる第二の根拠は、現在の一人当たりの穀物消費量が中・先進国の水準に比べてきわめて低いからである。現在のそれは年間ほぼ一六〇～一八〇キログラム程度だが、それは直接食料として消費される直接消費量だけでなく家畜のエサ(間接消費量)も含まれた量である。一般に、経済が発展すれば、まず直接消費量が増える。しかし所得水準が更に向上すると畜産物の消費が増大しはじめ、家畜の飼料用穀物の消費が増大する。この段階になると直接消費する穀物量は減少するが、飼料用穀物の消費が増えるため、全体としての一人当たり穀物消費はかなりの水準まで増加するのである。世界の中進国や先進国では一人当たりの年間穀物消費量は三〇〇～四〇〇キログラムが一般的であり、インドの穀物消費量に比べると二倍あるいはそれ以上の量である。インドが今後順調に経済成長をとげれば、穀物消費が大幅に増加する可能性がある。もちろん、こうした議論に対する反論もある。インド人の多数はヒンドゥー教徒であり肉食主義者だから、畜産物需要は低位にとどまり、結果として将来の一人当たりの穀物需要量も大きく増加することはないだろうという予測である。確かに、食物に対する文化の影響力は無視できないが、長期的には食文化は大きく変わりえる。実際、

多くのヒンドゥー教徒は肉を食べるし(地域性が大きい)、近年、牛乳(水牛乳を含む)や鶏肉、鶏卵の消費が急増している。それに伴って穀物、特にトウモロコシやソルガムなどの雑穀における飼料比率が高まっている。現在進行中の経済発展とグローバルイゼーションは、インドの食文化の変容を進める大きな力となるであろう。

五. 穀物増産の可能性と制約要因

中長期的に見てインドの穀物需要が大幅に伸びる可能性があることは、インドが巨大な穀物輸入国となることを意味するのだろうか。必ずしもそれは正しくはなく、世界穀物市場における将来のインドの位置は、穀物の増産の可能性にも大きく依存している。結論から先に述べれば、インドの穀物生産増大は大きな可能性を持つと同時に、その実現のためには乗り越えるべき大きな課題が存在している。大きな可能性とは、インドの単位面積当たり穀物生産量はまだ一ha当たり一・五トン程度に過ぎず、穀物が本来持つ潜在能力を生かせれば増産余地は非常に大きいことである。水や肥料など適切な投入財を供給するシステムが整えば、インドの穀物生産量は今後飛躍的に増大する可能性を持っている。

しかし、その前に立ちはだかる最大の課題は、持続的な灌漑システムの構築である。穀物増産のためには人工的に管理された灌漑設備が必要であり、近年は特に地下水を利用した小規模灌漑の役割が大きくなっている。しかし、降水量の少ない西部地区は当然のこととして、降水量に恵まれた東部においても、地下水位の低下が問題となっている。大河川を利用した灌漑も大規模な投資が必要になることや投資効率などの点で問題がある。持続可能な灌漑システムの構築が、インドが今後も順調に穀物増産を続けるために必要不可欠な条件となることは確実である。

六. おわりに

インドは中国に次ぐ人口大国であると同時に、世界有数の農業大国でもある。にもかかわらず、近年までその食料生産は豊凶によって輸出・輸入を若干行う以外は、ほぼ一国完結型の需給構造で国際市場における役割は小さいものであった。

しかし、特に八〇年代に入って経済発展に拍車がかかり、またWTOへの加入により、消費および生産の面においてインドの農業は大きく変わる可能性が高くなってきた。インドが長期的には穀物輸出大国となるか、それとも逆に輸入大国となるかは、不確実性の高い要素が多く、簡単には予想ができない。だが、経済発展に伴う一人当たりの穀物需要の増加と水問題の深刻さを考慮すれば、穀物輸入大国となる可能性を考えておかなければならないだろう。それによって将来的には日本に大きな影響を与える可能性も視野に入れておく必要があるだろう。

(須田敏彦)